

# 今日の1分を笑うものは、 明日の1秒に泣く

ーモヤシからのメッセージー

これはイギリスの政治家で、文人のフィリップ・チェスターフィールド(1694-1773)の名著『息子への手紙』("Letters To His Son")(1774)の中の一節である。

そこで彼は以下のように書いている。

**「富や財産をうまく使える人は少ない。けれど、もっと少ないのが、時間をうまく使える人だ。そして、時間をうまく使える方が、富や財をうまく使えるより大切なのは、言うまでもない。」**

この本が出版されたのは、日本でいえば今から230年以上も前の江戸時代のこと。しかし、本当に今から200年以上も前に書かれたのかと思うほど、その中身はどんなことも今の日本にあてはまり、実に感心しながら読める。そして、考えさせられる本でもある。

この本は父から息子への手紙をまとめたものだが、どのページを読んでも、今の君たちに考えてもらいたい事ばかりだ。今の君たちにあてはまることもたくさん書かれている。

このあと高校生になって、時間があれば、ぜひ読んでみてほしい。

この本は、現在「わが息子よ、君はどう生きるか」という邦題で三笠書房より知的生きかた文庫として出版されている。

訳者は竹内均(故人)という東大名誉教授で地球物理学者。科学雑誌「ニュートン」の編集長でもあった。このことば(手紙)を書いた人チェスターフィールドの生きた時代とその背景などを少し書いておこう。訳者である竹内均さんの解説から。

「彼は今から300年近くも前の人である。彼が活躍した頃のイギリスはロバート・ウォルポールのもとで、1721年以来20年あまりも続く自由と繁栄を楽しんでいた。

ケンブリッジ大学を中退したチェスターフィールドは大陸旅行をし、パリに長く滞在した。ルイ14世のもとでそのころのフランスは世界一の文化国家であった。それに比べてイギリスは、次々と大陸から輸入された王が英語をも話せないという状態であり、経済的にも貧しかった。

若き日をパリで過ごしたチェスターフィールドが、フランスの教養・趣味・やり方に一生敬意を払い続けたのも無理はない。1726年に伯爵家を継いだ彼は、1728年にオランダ大使となり、1732年までハーグに駐在した。その間に一人の女性との間に生まれた男の子がフィリップ・スタナップであり、彼こそがチェスターフィールドからの手紙を受け取った「息子」であった。

チェスターフィールドやウォルポールの時代は重商主義の時代と呼ばれる。富裕な市民や近代

的な地主を基盤として議会制度を確立し、外国との条約を結ばず戦争をせず、大国フランスとの協調を第一とし、こうして浮いた金のことごとくを経済発展に注いだ。ジェームズ・ワットによる蒸気機関の改良その他が進み、チェスターフィールドが亡くなる頃にはすでに、イギリスは世界一の工業国で議会主義の国になっていた。」

さて、統一テストが終わったかと思ったら、すぐに次の実力テストである。そしてまたすぐに後期の中間テストである。しっかりやってもらいたい。

しかし、この試験の結果はどうやって生まれたものなのだろうか？

一生懸命努力した人、勉強に時間を費やした人、朝学習にきちんと取り組んだ人、そんな人は結果を出すだろう。そして、もちろんその反対の人もいるはずだ。

つまり、生活習慣と学習成績には関係があるということである。生活習慣に成績は比例するのである。真面目な人、きちんとしたことをする人は勝手に成績が上がるのだ。

おまけだが、我が家の子どもたちのことを書いておこう。

子どもが高校生になって、しばらくしてからのことだ。家で、勤務していた学校の3年生のことを話しながら、受験生の時間の使い方について話をしていた時だ。長女が言った。「そう言えば、わたしって、中3の時の1年間、テレビってまったく見なかったよ。」と。「へえ、そうだったの？」と親ながら感心して聞いていた。何しろ自分は帰宅が遅く、帰った時にはすでに子どもたちは自分たちの部屋にこもっていたので、それまでの時間の使い方をろくに知らない親だった。しかし、テレビを見なくても何も困らないものである。それに、気分転換の手は多種多様だ。

ちなみに、我が家の子どもたちはまったく塾にも行っていなかったし、家庭教師もいなかった。通信講座などもやっていなかった。やっていたのは学校でもらったものが基本だ。朝学習は前日にていねいにやり、学校でもらった問題集はすべてやり尽くし、教科書の問題もすべてやり尽くし、いろいろな時間に学校でもらえるプリント（たとえば過去問とか自習時間のプリントなど）もすべてやり尽くしていた。つまりは先生がやりなさいということすべてやり尽くしてただけであり、特別にやったことといえば、最後にはする問題集がなくなったので、本屋に行って不得意分野の問題集を買ってきて取り組んだくらいである。とにかく学校の先生にやりなさいといわれたことをすべてやり尽くさないと気がすまない性格だったので、もらったものはすべてやり尽くしていたのだ。あとは自分の独自の勉強ノートや単語や社会科の暗記事項のカードを作り、取り組んでいた。つまりは、家庭教師がいなくても、塾に行かなくても、学校の授業を大切に、宿題はすべてやり尽くすだけで、実力テストや定期テストで平均70点や80点は取れるのである。それが義務教育の学校というものであり、文部科学省の定めた学習内容は誰でもまじめに授業を受けて、やるべきことをやっておれば身に付く内容なのである。

考えてみてほしい。学校の授業は毎日5～6時間。3年生なら朝学習に取り組むのに家と学校で1時間。これに集中するだけでもかなり有効な時間の使い方である。やらない人に比べると、3年間で数百時間、いや数千時間の差があるのだ。結果に、つまり成績に差がつくはずである。

さて、お話は戻って、この本のそもそもの冒頭は次のような文章で始まっている。

**「君に何よりも知ってもらいたいことがある。それは、時間の貴重さと、その使い方だ。これをほんとうに知っている人はほとんどと言っていいくらい見あたらない。」**

みなさんの時間の使い方はどうだろうか？しっかりとした使い方をしているだろうか？

一人ひとりに与えられた時間は全く平等に1日に24時間しかない。だから、その24時間をどのように使うのか、その使い方にかかっている。朝学習の時間、授業中、それに休み時間、放課後。見ていると実に無駄に使う人もいれば、大変有意義に過ごしている人もいる。それで現れる結果の差というのはとても大きいものだ。だから、しっかりとそれを自覚して無駄のない時間を過ごしてもらいたいものである。そして、その結果得られるものは、みなさんにとっては素晴らしいものであることだろう。

最後にこの本の中の一節でこの文章を締めくくろう。

**『今この時をどう生きるか』が君の人生を決める。**